

## 温州ミカンの収量予測について ( 果実肥大の推測 )

岸野 功  
(長崎県総合農林センター果樹部)

KISHINO, I.

Forecasting Yield of Satsuma Fruits.

( On the fruit enlargement and the forecast of fruit size )

温州ミカンの生産量の増加に伴って、できるだけ早く生産量を予測し、計画的な出荷販売を行なうことがきわめて重要になる。温州ミカンの収量予測法のうち、結果数の推測については、さきに報告したが、今回は果実肥大の推測法について報告する。

### 調査方法

昭和38, 39年は尾張系について、40, 41, 42年は林, 伊木力, 宮川系について、1樹当り30~50個の果実にラベルをつけ、10日ごとに横径、縦径を調査し (1) 発育途中の果実の大きさと、収穫時の果実の大きさの関係、(2) 果実の“肥大係数”について検討した。

なお、果実の大きさは、田端市郎等の  $(\text{横径} \div 2)^2 \times \text{縦径} \times \pi$  より求めた。“肥大係数”は収穫時の果実の大きさを発育途中の果実の大きさで除した値である。

### 結果および考察

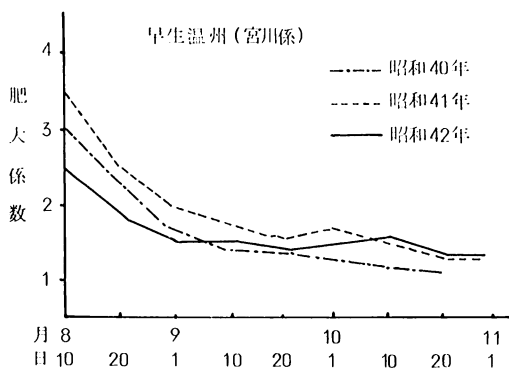
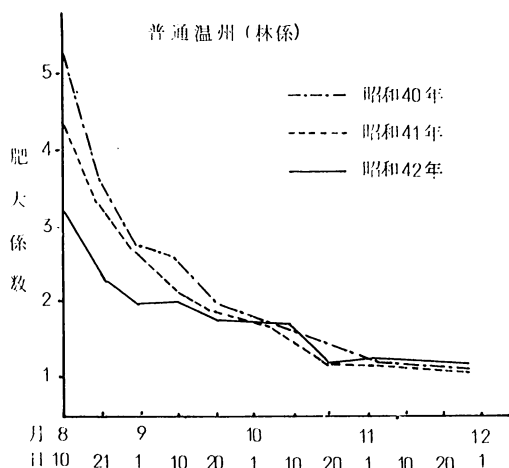
1) 上記の計算体積と実体積との間には、高い相関が認められ、7月10日を除いて、実体積は計算体積の0.7倍であった。7月10日のみは1.3倍になったが、この原因として、7月上旬には50mm以上の降雨が3回あったことがあげられる。しかし、詳細については明らかでない。

2) 発育途中の果実の大きさと収穫時の果実の大きさとの間には、早生温州では8月10日以降、普通温州では9月10日以降になるとかなり高い相関が認められる。

しかし、この両者の回帰式は年や樹によって違うので、これを直ちに果実肥大の予測に使うことはできない。

3) これに対して、果実の“肥大係数”は、9月

10日以前には年によってかなり違うが、9月20日以降になると年によるフレが小さくなる。また、この“肥大係数”は、結果量や樹令によるフレも小さく、果実肥大の予測に利用できる可能性がある。



第1図 果実肥大係数の時期による変化